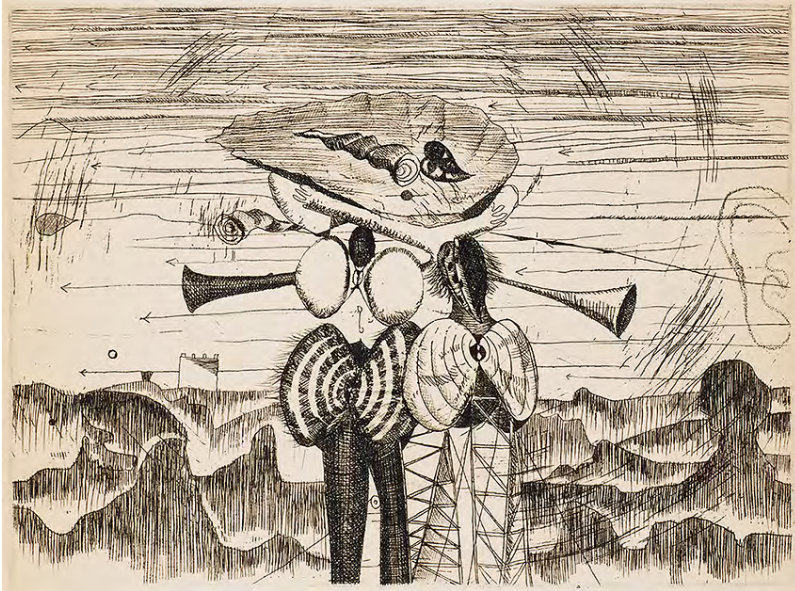


泉茂 1950s 陽はまた昇る

2024年6月14日（金）～7月28日（日） 市立伊丹ミュージアム

戦後関西を代表する画家、泉茂の50年代の創作を紐解く回顧展



[1] 《作品》（詩画集『大阪』より 小野十三郎「わがたてるところより」によせる）1955年 個人蔵



[2] 《逃げたスペード》1955年 徳島県立近代美術館蔵

泉茂（1922-1995）は大阪市に生まれ、1940年代後半から約50年にわたり戦後関西の芸術動向を牽引しつづけた画家です。1951年、大阪で結成されたデモクラート美術家協会への参加を契機に、シュルレアリスムをはじめとする先鋭的な作品を制作し、前衛美術家としてのキャリアを歩みはじめました。戦後の目まぐるしい社会の変化を敏感に感じ取りながら、常に表現を深化し、展開させて生み出した作品は、初期の抒情的な版画からその後の洗練された抽象絵画にいたるまで、独自のユーモアに彩られています。

「勇気と自信を或いは、生きるよるこびとかなしみ」を与える絵を描きたいと願いつづけた泉。その願いは、画家になりたいという希望を心の奥に抑圧しながら必死に生きた、戦争の記憶とも深く結びついています。「陽はまた昇る」という本展のタイトルは、戦後の危機的状況のなかでも、自由な精神と人間への信頼を作品で示しつづけた、泉の50年代の活動を象徴的に表したものです。戦後の荒廃した風景のなかで自己と社会を見つめ、その地平線の先に希望の夜明けを見つづけた創作の軌跡は、不安定な現代を生きる私たちにも多くの示唆を与えることでしょう。

本展では、泉の作品に加え、泉の創作に関わる同時代の海外美術の動向や、異なる領域の表現者の作品や資料などあわせて約100点を紹介し、泉が創作にかけた想いを紐解きます。

泉茂 略歴

1922年、大阪市生まれ。大阪市立工芸学校（現：大阪府立工芸高等学校）で洋画家の赤松麟作や、バウハウスの造形理論教育を実践した山口正城らに学び、1951年、瑛九（1911-1960）を中心に大阪で組織されたデモクラート美術家協会の結成に参加。57年、第1回東京国際版画ビエンナーレ展で新人奨励賞を受賞し、戦後の美術界を担うひとりとして高く評価されました。シュルレアリスムの手法を用いた幻想的な作風で、戦後の苦悩や希望が入り交じる複雑な心情を詩情豊かに表現しました。50年代末には、自己変革を目指しニューヨークに移住し、その後パリでの活動を経て、幾何学的な抽象絵画へと作風を展開。68年に帰国し、大阪芸術大学で教師を務めるなど、後進の育成にも尽力しました。1995年に没するも、今日まで強い存在感で関西の美術界に影響を与えつづけており、戦後の日本美術を回顧する多くの展覧会で取り上げられています。

開催概要

展覧会名：泉茂 1950s 陽はまた昇る / (英) Shigeru Izumi in the 1950s, The Sun Also Rises

主催：市立伊丹ミュージアム [伊丹ミュージアム運営共同事業体 / 伊丹市]

企画：鈴木寛和 (市立伊丹ミュージアム学芸員)

会期：2024年6月14日(金)～7月28日(日)

会場：市立伊丹ミュージアム [展示室3・5]

(〒664-0895 兵庫県伊丹市宮ノ前 2-5-20)

休館日：月曜日 (7月15日は開館、翌16日は休館)

開館時間：10:00～18:00 (入館は17:30まで)

観覧料：一般500(400)円、大高生300(250)円、中小生200(150)円

※ () 内は20名以上の団体料金

※兵庫県内の小中学生はココロンカード提示にて無料

※伊丹市在住の高齢者料金有 (平日60歳以上、土日祝65歳以上)

同時開催：「季節を愛でる一俳諧と茶の湯」 [展示室1・2]

[観覧料：一般800(700)円、大高生600(550)円、中小生450(350)円]

※「泉茂 1950s 陽はまた昇る」とのセット券：一般1,200(1,000)円、大高生800(700)円、中小生600(450)円

一般のお問い合わせ：TEL：072-772-5959 (代表) 市立伊丹ミュージアムウェブサイト：<https://itami-im.jp/>



[3] 《机上》1952年 市立伊丹ミュージアム蔵

本展のみどころ

1. 戦後関西を代表する画家、泉茂の50年代に焦点

戦後美術の黎明期に、デモクラート美術家協会の中核作家として活躍した泉茂。泉の思考と表現の核に迫ることを目指し、本展では当館が所蔵する作品に、徳島県立近代美術館と個人が所蔵する作品と資料を加え、創作の起点となる50年代に焦点を当てます。

2. 不安な時代を生き抜いた、若き画家の苦悩と格闘に迫る

戦後の危機的状況のなかでも、泉は自由な精神と人間への信頼を作品で示しつづけました。《逃げたスペード》や《深夜のセロ弾き》、《インディアン》などの代表作のほか、回顧展初出品となる作品を含む約100点の作品と資料から、時代と格闘した若き画家の実像に迫ります。

3. 泉が敬愛したモダンアートの巨匠、 フェルナン・レジェの作品も登場

泉はレジェを「太陽」にたとえ、その明るく健康的な人間像を手がかりにしながら、ヒューマニズムに根ざした芸術の理想を探求しました。本展では、二人の作品をともに展観することで、レジェに対する泉の関心とその影響を浮き彫りにします。



[4] 《仲間》1955年 個人蔵



[5] フェルナン・レジェ《美しい自転車乗り》1944年
徳島県立近代美術館蔵

本展の構成

プロローグ ロスト・ジェネレーション

本展は、当館が所蔵する油彩画《机上》(1952年)から始まります。一見、キュビズム風の静物に見えますが、描かれたオレンジ色の帯を左上からなぞっていくと、画中に「LOST」の文字が隠されていることがわかります。描かれた“喪失感”は一体何を意味し、泉は50年代を通じてそれとどのように向き合っていたのでしょうか。この疑問が本展の出発点です。



[6]《夜明け前》1953年 徳島県立近代美術館蔵

第1章 夜明け前

1951年、泉は瑛九が立ち上げたデモクラート美術家協会の結成に参加し、瑛九やグループの活動を支援した久保貞次郎との出会いをきっかけに、版画制作に関心を持つようになりました。第1章では、版画制作を始めた最初期の銅版画を中心に展覧し、銅版画の技法的な側面に触発されながら、泉が自らの向かうべき表現の可能性を切り開いていった過程を紹介します。



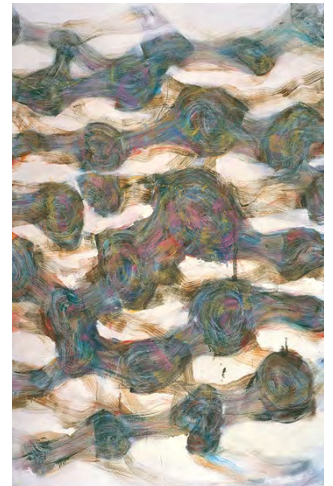
[7]《インディアン》1956年 個人蔵

第2章 風景の果て

二十歳前後の多感な時期を戦争に費やした泉にとって、文学作品は自身の言葉では表現できない不安や悲しみを代弁してくれるものでした。泉は自身の心情を文学作品と同化させることで、「生きている証」を実感することができたと回顧しています。第2章では、詩人たちとのコラボレーションに注目しながら、荒廃する工業地帯などの風景を主題に、戦後の厳しい時代を生きる苦悩や希望を込めて描いた、泉の心象風景とも呼べる作品を紹介します。

第3章 色めく幻影

同じ版画であっても、銅版画と異なる造形的な効果が得られるリトグラフは、泉の表現に変化をもたらしました。画面には色彩が施されるようになり、より大きな作品が制作されるようになりました。第3章では、日々活力を発揮してたくましく生きる人々の息吹を象徴的に表現した、明るく開放的なリトグラフ作品を中心に、並行して制作された水彩画もあわせて紹介します。



[8]《Work》1961年 市立伊丹ミュージアム蔵

第4章 「太陽」をみつめて

モダンアートを代表する巨匠、フランス人画家フェルナン・レジェは、泉が最も敬愛した画家のひとりです。泉はレジェを「太陽」にたとえ、レジェが描く明るく健康的な人間像を手がかりにしながら、戦後の新しい時代にふさわしい表現を具体化していきました。第4章では、泉とレジェの作品を同じ空間に展覧し、レジェに対する泉の関心と影響を浮き彫りにしながら、泉が探求しつづけたヒューマンイズムに根ざした芸術とその理想に迫ります。

第5章 羽ばたく

第1回東京国際版画ビエンナーレ展(1957年)で新人奨励賞を受賞するなど、泉は戦後の美術界を担う新人のひとりとして高く評価されました。しかし、「版画家」という自身の表現の幅を狭めてしまう周囲の評価に対して、泉は次第に危機感を抱くようになり、自己変革のためにアメリカへ渡ることを決意しました。第5章では、泉が好んで描いた「鳥」のモチーフに注目しながら、それまでの表現を否定的媒介として、抽象表現へと羽ばたいていった創作の軌跡を紹介します。



[9]《逃げたスペード(2)》1988年 市立伊丹ミュージアム蔵

エピローグ 逃げたスペードのゆくえ

泉はその後、表現を更新しつづけ、手作業の痕跡すらも感じさせない幾何学的な抽象にいたるまで、絵画の平面性を追求するモダニズムの潮流をリードしました。展覧会の締めくくりとして、ここでは1950年代から一気に時を進め、泉が晩年を迎える80年代後半に制作した《逃げたスペード(2)》を取り上げます。50年代を振り返りながら制作された本作には、泉のどのような心境が反映されているのでしょうか。泉の言葉とともに振り返ります。

広報用画像申込書

本展を貴媒体でご掲載いただくにあたり、広報用画像をご希望の場合は、本用紙にご記入の上、メール (gakupei@itami-im.jp) または FAX (072-781-9090) にてお申し込みください。

- ◆広報用画像の使用は、本展をご紹介いただく場合のみ可能です。
- ◆本展終了後の使用、別の記事などへの二次使用はできません。使用後は、データの破棄をお願いいたします。
- ◆展覧会名、会期、会場名、画像キャプション・クレジットを明記してください。
- ◆画像は全図でご使用ください。トリミング、文字を重ねるなど、画像の加工・変更はできません。
- ◆基本情報、画像使用などの確認のため、ゲラ刷り・原稿段階のものを当館までお送りください。
- ◆掲載後は、掲載誌を当館へ1部ご送付いただきますよう、お願い申し上げます。

画像 (別紙プレスリリースをご参照ください。)

希望	No.	画像キャプション・クレジット
	1	《作品》(詩画集『大阪』より 小野十三郎「わがたてるところより」によせる) 1955年 エッチング 個人蔵
	2	《逃げたスピード》 1955年 カンヴァスに油彩 徳島県立近代美術館蔵
	3	《机上》 1952年 カンヴァスに油彩 市立伊丹ミュージアム蔵
	4	《仲間》 1955年 エッチング、アクアチント 個人蔵
	5	フェルナン・レジェ《美しい自転車乗り》 1944年 カンヴァスに油彩 徳島県立近代美術館蔵
	6	《夜明け前》 1953年 エッチング 徳島県立近代美術館蔵
	7	《インディアン》 1956年 リトグラフ 個人蔵
	8	《Work》 1961年 カンヴァスに油彩 市立伊丹ミュージアム蔵
	9	《逃げたスピード (2)》 1988年 カンヴァスにアクリル 市立伊丹ミュージアム蔵

貴社名/媒体名	貴社名	媒体名
ご所属/ご担当者	ご所属	ご担当者
TEL / FAX	TEL	FAX
E-mail		
掲載日	<input type="checkbox"/> WEB への転載あり <input type="checkbox"/> WEB 掲載のみ	
チケット プレゼント	<input type="checkbox"/> 希望する _____ 組 _____ 名分 (5組10名分まで) お送り先/〒	